

納豆合戦

菊池寛

青空文庫

皆さん、あなた方は、納豆売の声を、聞いたことがありますか。朝寝坊をしないで、早くから眼めをさましておられると、朝の六時か七時頃ごろ、冬ならば、まだお日様が出ていない薄暗い時分から、「なつと、なつとう！」と、あわれつぽい節を付けて、売りに来る声を聞くでしょう。もつとも、納豆売は、田舎いなかには余りいないようですから、田舎に住んでいる方は、まだお聞きになつたことがないかも知れませんが、東京の町々では毎朝納豆売が、一人や二人は、きつとやって来ます。

私は、どちらかといえば、寝坊ですが、それでも、時々朝まだ暗いうちに、床の中で、眼をさましていると、

「なつと、なつとう！」と、いうあわれっぽい女の納豆売の声を、よく聞きます。

私は、「なつと、なつとう！」という声を聞く度に、私がまだ小学校へ行っていた頃に、納豆売のお婆ばあさんに、いたずらをしたことを思い出すのです。それを、思い出す度に、私は恥しいと思います。悪いことをしたもんだと後悔します。私は、今そのお話をしようと思います。

私が、まだ十一二の時、私の家いえは小石川こいしかわの武島町たけじまちようにあり、でんずういん伝通院のそばにある、礫川れきせん学校がっこうへ

通っていました。私が、近所のお友達四五人と、礪川学校へ行く道で、毎朝納豆売の盲目のお婆さんに逢いました。もう、六十を越しているお婆さんでした。貧乏なお婆さん見え、冬もボロボロの袷あわせを重ねて、足袋たびもはいていないような、可哀かあいそうな姿をしておりました。そして、納豆の苞つとを、二三十持ちながら、あわれな声で、

「なつと、なつとう！」と、呼びながら売り歩いているのです。杖つえを突ついて、ヨボヨボ歩いている可哀たいていそうな姿を見ると、大抵たいていの家いえでは買かってやるようでありました。

私達は初めのうちは、このお婆さんと擦すれ違ちがつても、誰たれもお婆さんのことなどはかまいませんでした。ある日のことです。私

達の仲間で、悪戯いたずらの大将と言われる豆腐屋の吉公きちこうという子が、向うからヨボヨボと歩いて来る、納豆売りのお婆さんの姿を見ると、私達の方を向いて、

「おい、俺おれがお婆さんに、いたずらをするから、見ておいで。」
と言うのです。

私達はよせばよいのにと思いましたが、何しろ、十一二という悪戯いたずら盛りですから、一体吉公がどんな悪戯をするのか見ていたという心持もあつて、だまつて吉公の後あとからついて行きました。すると吉公はお婆さんの傍そばへつかつかと進んで行って、

「おい、お婆さん、納豆をおくれ。」と言いました。すると、お婆さんは口をもぐもぐさせながら、

「一銭の苞つとですか、二銭の苞ですか。」と言いました。

「一銭のだい！」と吉公は叱しかるように言いました。お婆さんがお
ずおずと一銭の藁苞わらづとを出しかけると、吉公は、

「それは嫌いやだ。そつちの方をおくれ。」と、言いながら、いきな
りお婆さんの手の中にある二銭の苞を、引つたくつてしまいまし
た。お婆さんは、可哀かあいそうに、眼が見えないものですから、一銭
の苞の代りに、二銭の苞を取られたことに、気が付きません。吉
公から、一銭受け取ると、

「はい、有難うございます」と、言いながら、又ヨボヨボ向うへ
行つてしまいました。

吉公は、お婆さんから取つた二銭の苞を、私達に見せびらかし

ながら、

「どうだい、一銭で二銭の苞を、まき上げてやったよ。」と、自分の悪戯を自慢するように言いました。一銭のお金で、二銭の物を取るのには、悪戯というよりも、もつといけない悪いことですが、その頃私達は、まだ何の考かんがえもない子供でしたから、そんなに悪いことだとも思わず、吉公がうまく二銭の苞を、取ったことを、何かエライことをでもしたように、感心しました。

「うまくやったね。お婆さん何も知らないで、ハイ有難うございます、と言ったねえ、ハハハハ。」と、私が言いますと、みんなも声を揃そろえて笑いました。

が、吉公は、お婆さんから、うまく二銭の納豆をまき上げたと

いっても、何も学校へ持って行って、喰^たべるといふのではありません。学校へ行くと、吉公は私達に、納豆を一掴^{つか}みずつ渡しなから、

「さあ、これから、戦^{いくさ}ごっこをするのだ。この納豆が鉄砲丸^{てつぽうだま}だよ。これのぶっつけ^{たくみ}こをするんだ。」と、言いました。私達は二組^{ふくみ}に別れて、雪合戦^{ゆきがっせん}をするように納豆合戦をしました。キャツキヤツ言いながら、納豆を敵に投げました。そして面白い戦ごっこをしました。

あくる朝、又私達は、学校へ行く道で、納豆売のお婆さんに逢いました。すると、吉公は、

「おい、誰か一銭持っていないか。」と言いました。私は、昨日^{きのう}

の納豆合戦の面白かったことを、思い出しました。私は、早速さっそく持っていた一銭を、吉公に渡しました。吉公は、昨日と同じようにして、一銭で二銭の納豆を騙だまして取りました。その日も、学校で面白い納豆合戦をやりました。

二

その翌日です。私達は、又学校へ行く道で、納豆売のお婆おばさんに逢あいました。その日は、吉公きちこうばかりではありません。私も面白い面白くなって、一銭で二銭の苞つとを騙だまして取りました。すると、外ほかの友達も、

「俺おれにも、一銭のをおくれ。」と、言いながら、みんな二銭の苞かぶを、騙して取りました。お婆さんが、

「はい、有難うございます。」と、言っているうちに、お婆さんの手の中の二銭の苞は、見る間に二つ三つになってしまいました。

そのあくる日も、そのあくる日も、私達はこのお婆さんから、二銭の苞を騙して取りました。人の良いお婆さんも、家うちへ帰って売上げ高を、勘かんじょう定じょうして見ると、お金が足りないのです、私達に騙されるのに、気がついたのでしよう。そつと、交番のお巡査まわりさんに、言いつけたと見えます。

お婆さんが、お巡査さんに言ったとは、夢にも知らない私達は、ある朝、お婆さんに出くわすと、いつもの吉公が、

「さあ、今日も鉄砲丸を買わなきやならないぞ。」と、言いながら、お婆さんの傍へ寄ると、

「おい、お婆さん、一銭のを貰うぜ。」と、言いながら、何時ものように、二銭の苞を取ろうとしました。すると、丁度その時です。急に、グツグツという靴の音がして、お巡査さんが、急いで馳けつけて来たかと思うと、二銭の苞を握っている吉公の右の手首を、グツと握りしめました。

「おい、お前は、いくら納豆を買ったのだ。」とお巡査さんが、怖しい声で聞きました。いくら餓鬼大将の吉公だといって、お巡査さんに逢つちや堪りません。蒼くなつて、ブルブル顫えながら、「一銭のです、一銭のです。」と、泣き声で言いました。すると、

お巡査さんは、

「太い奴だ。やつこれは二銭の苞じやないか。この間中から、このお婆さんが、納豆を盗まれる盗まれると、こぼしていたが、お前達いたずらが、こんな悪戯をやっていたのか。さあ、交番へ来い。」と、言いながら、吉公を引きずって行こうとしました。吉公は、おいおい泣き出しました。私達も、吉公と同じ悪いことをしているのですから、みんな蒼くなつて、ブルブル震えていました。すると、吉公はお巡査さんに引きずられながら、「私一人じゃありません。みんなもしたのです。私一人じゃありません。」と言つてしまいました。するとお巡査まわりさんは、恐こわい眼で、私達を睨にらみながら、「じゃ、みんなの名前を言つてご覧。」と言いました。そう言わ

れると、私達はもう堪らなくなつて、

「わあッ。」と、一ぺんに泣き出しました。

すると、傍そばにじつと立っていた納豆売のお婆さんです。私達が、

一緒に泣き出す声を聞くと、急に盲目めくらの眼を、シヨボシヨボさせ

たかと思うと、お巡査さんの方へ、手さぐりに寄りながら、

「もう、旦那だんなさん、勘かん忍にんして下さい。ホンのこの坊ちゃん達の

いたずらだ。悪気わるきでしたのじやありません。いい加減に、勘忍し

てあげてお呉くんなさい。」と、まだ眼を光らしているお巡査さん

をなだめました。見ると、お婆さんは、眼に一杯涙を湛たたえている

のです。お巡査さんは、お婆さんの言葉を聞くと、やつと吉公の

手を離して、

「お婆さんが、そう言うのなら、勘弁かんべんしてやろう。もう一度、こんなことをすると、承知をしないぞ。」と、言いながら、向うへ行つてしまいました。すると、お婆さんは、やっと安心したように、

「さあ、坊ちゃん方、はやく学校へいらつしやい。今度から、もうこのお婆さんに、悪戯いたざらをなさるのではありませんよ。」と言いました。私は、お婆さんの眼の見えない顔を見ていると穴の中へでも、這入りはいたいような恥しさと、悪いことをしたという後悔とで、心の中が一杯うちになりました。

このことがあつてから、私達がぷつぷつりと、この悪戯を止めやめたのは、申す迄までありません。その上、餓鬼大将の吉公さえ、前よ

りはよほどおとなしくなったように見えました。私は、納豆売のお婆さんに、恩返しのため何かしてやらねばならないと思いました。それでその日学校から、家へ帰ると、

「家では、納豆を少しも買わないの。」と、お母さんに、ききました。

「お前は、納豆を喰べたいのかい。」と、お母さんがきき返しました。

「喰べたくはないんだけど、可哀そうな納豆売のお婆さんがいるから。」と言いました。

「お前が、そういう心掛で買うのなら、時々は買つてもいいお父様は、好きな方なのだから。」と、お母さんは言いました。

た。それから、毎朝、お婆さんの声が聞えると、お金を貰^{もら}って納豆を買いました。そして、そのお婆さんが、来なくなる時まで、私は大抵^{たいてい}毎朝、お婆さんから納豆を買いました。

青空文庫情報

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年6月25日発行

1974（昭和49）年9月10日29刷改版

1989（平成元）年10月15日48刷

底本の親本：「赤い鳥 復刻版」日本近代文学館

1968（昭和43）年～1969（昭和44）年

初出：「赤い鳥」

1919（大正8）年9月号

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2005年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

納豆合戦

菊池寛

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>